

校長室から 第27号

本校の開校はいつなのか？ ～その10～

先述したとおり、北海道は独自の制度のもとで、他の府県に比べ簡易な教育を認可し続けることで、小学校教育を普及してきました。それは、住民に多額の負担を強いることでもありました。本村においても住民自らが、生活が苦しい中でも、教育所、尋常小学校を設置していったのでした。

さてここで、時代は前後しますが、開校当時の様子がよくわかる文章を紹介しましょう。



全額寄附によって建てられた2代目の校舎

小川猛夫（1977）『開拓よもやま話（古老談話）』西興部村 からです

「先生を追い出した生徒」 吉野軍次郎 明治29年6月24日生 宮城県出身

私は七重に移ってから、六興の教育所に通うことになったが、うちのおやじは、人一倍働く方なので、夏は学校よりも畠の手伝いをさせられ、1年の内半分位しか通学できなかった。

その頃の教育所は、旧六興橋近くの市街寄りの高地にあって、4間に5間位（1間は1.82米）の掘立てで、屋根だけは桎葺きだったが、壁も長割桎の一重だったので冬は寒く、父兄の手で、稲きび殻で壁を囲ってもらった。教室は一教室で、板の間にむしろ敷きで、冬は焚火だったが、間もなく丸い大きな薪ストーブがついた。初めは机がなく、腹ばいになって字を書いた。学用品もエンピツがなく、石板に筆で字を書き、硯のない生徒は、イタヤの木を、硯のように作って使っている者もあった。これらを風呂敷に包んで、肩から背負って通学したものだ。

服装は、着物にもんぺで、夏は手製の下駄や唐きび殻の草履、冬は赤毛布を足に巻いて「つまご」を履いた。しばれる日には、帰るとき「つまご」がかんかんにしばれて足が入らず、困ったことがあったが、その後、ストーブの上に棚を吊ってもらってからは楽になった。

そのころの生徒は、年令がまちまちで、17、8才になる者もいて20貫（約75キロ）の俵をかつぐ生徒さえいた。先生は赤坂三五郎といって、沙留の漁場で帳場をしていたと言う人だった。5年生、6年生には、辞典と首引きしながら教える程度の先生であった。

この先生は、唱歌の時間になると、漁師の歌ばかり教えるので、ある時皆で流行歌を歌ったら先生は怒って、生徒たちを散々になぐりつけた。しまいには生徒たちも怒って、皆で先生を袋叩きにしてしまった。小学生と言っても、大きな力持ちの子供もいたから先生に負けなかった。翌日学校へ行ったら先生がいない。何所かに逃げて終わったのだ。今になると生徒の私たちも悪かったと思っている。仕方なく、上興部の教育所に通ううちに、渡部徳次先生が赴任してきた。渡部先生は、三浦さん附近で二階建ての宿屋をやりながら先生をしていた。

そのころ農繁期になると、赤ん坊の子守りをしながら通うものもあり、飽きた赤ん坊が泣き出したりして、満足な勉強が受けられなかった。

吉野軍次郎氏は、1913（大正2）年3月、本校を満16歳で卒業していますので、まさに本校の黎明期を、少年として過ごした人物です。「先生を追い出した生徒」から、当時の人々の暮らしとともに、「簡易な教育」の様子が目に浮んできます。なお、赤坂三五郎氏についての記録は、『学校沿革並現勢誌』及び『沿革誌』いずれにも残っていません。